

今福線研究分科会の来し方・行く末

村上英明

1、はじめに

今福線研究分科会が実際に始まったのは、2010年（平成22年）9月23日の打合せからであるので、昨年までで満5年活動が続けてきたわけである。

ここらで我々のこの5年間の活動を一度、振り返ってみて、今後を展望してみるのも意味があろうと考えて、まとめてみることにした。

2、今福線と研究分科会

今福線とは、幻の広浜鉄道（広島と浜田をつなぐ）の一部である。

ご存知のように、広島駅から三段峡まではJR可部線が開通していた。今日では広島駅から可部駅までは都市近郊線として電車の本数も多いが、可部駅から三段峡駅までの間は、採算不良のため2003年12月に廃止されて現在に至っている。

今福線は、まず戦前に山陰線の下府（しもこう）駅から三段峡駅までの鉄道を建設すべく計画し、国鉄により建設工事が始められたが、戦争突入に伴い資金不足のため建設の途中で工事中止された。

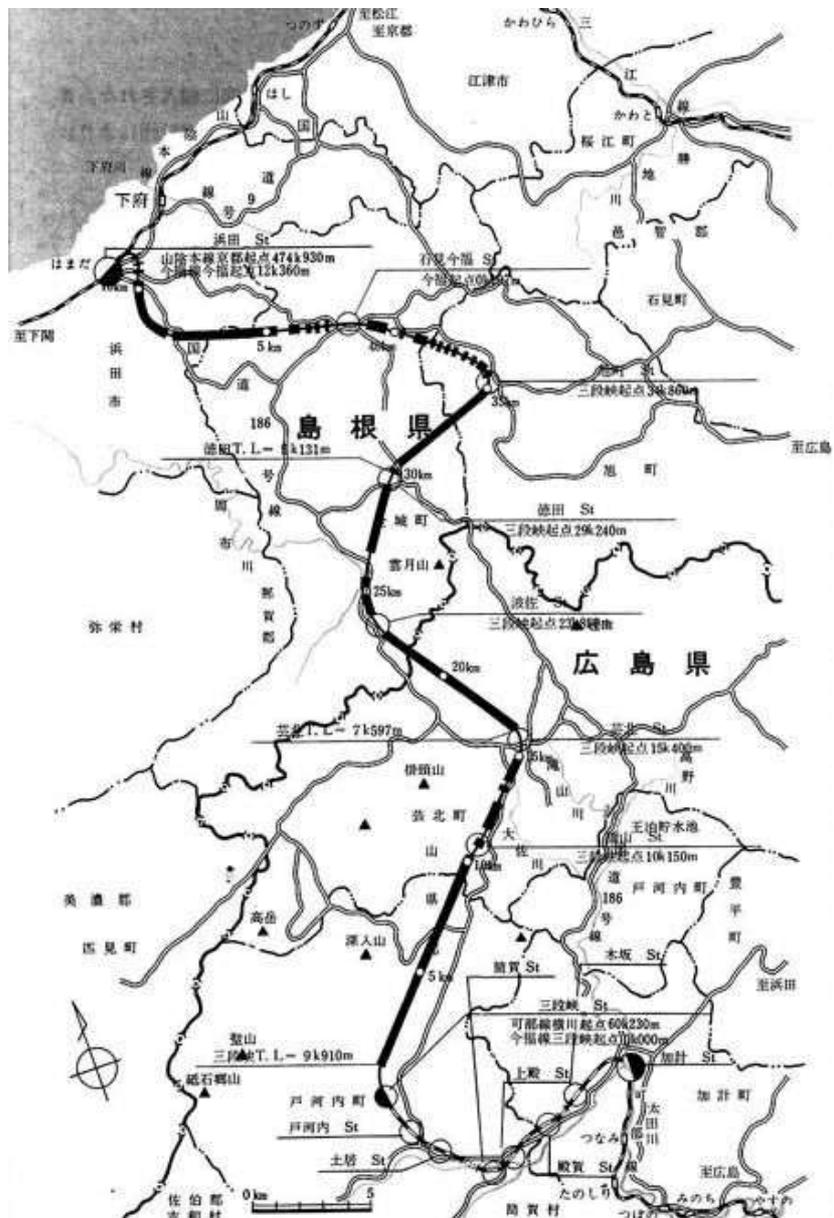


図-1、今福線（新線）路線概略図

戦後になり、この路線の工事を鉄道建設公団が再開することになったが、新しい規格の急行列車を通すためには旧線は線形が悪かったので、浜田駅から途中の今福までを新線として建設することになった。

そしてレール敷設まであと一步という段階にまで出来上がったが、国鉄の赤字のため工事が中止されてしまった。

戦前に一部出来ていた路線を旧線と呼び、戦後にできた線を新線と呼んでいるが、今福で旧線と新線は合流し一本となる。旧線も新線も共に完成を目前に中止されたままになってしまった、まことに数奇な運命の未成線である。

旧線の着工は1933年(昭和8年)、新線の中止は1980年(昭和55年)だったから、休止期間を挟みながら実に57年もの間の歴史がある。

出来上がった多くのトンネルや橋梁は、現在も使われることなく幻の鉄道遺構となって忘れ去られ、山の中や道路わきに眠っている。

そこで我々は今福線の遺構を調べ、何らかの社会的な光を当てたいと考えて、島根県技術士会として今福線研究分科会を発足させた。

3、初回打合せ

2010年(平成22年)9月23日、出雲市内の(株)コスモ建設コンサルタントにおいて、初回打合せを行った。概要は次のとおりである。

出席メンバー ; 嘉藤太史(分科会長)ほか9名

分科会の目的 ; ①遺構の保存
②地域資源としての利用方法を検討する

その方法 ; ①今福線の勉強
②地域活動への参加等
③当会としての提案
・観光財産としての掘り起こし 町おこし
・散策道としての整備
・遺構の保存方法 土木的
・情報発信 ・ルートの復元 等

4、予備調査と本調査

全メンバーで現地を本調査する前に、少人数で予備調査を行い、次いで本調査を行うことにした。

最初の予備調査は、2010年(平成22年)10月23日に4名で、本調査は同年11月20日に8名で行った。予備調査は地元の会員が日帰りで、本調査は会員のほとんどが参加して



写真-1、 第一回本調査メンバー

1泊2日で行うことにした。

初年度以降にも、必要に応じて予備調査を行い、毎回、それまでに行っていない区間を選んで踏査した。現場は数十年に渡って人々から忘れられ放置されたままになっており、路線敷には雑木が生い茂り、ナタで切り開きながら行かなければならないところもかなり多く踏査には時間がかかった。

もちろん作業服に長靴、ヘルメットの装備は欠かせなかった。トンネルに入るためには各自が懐中電灯を携帯しなければならなかったし、熊に遭遇するのを避けるため熊鈴を腰につけカランカラン鳴らしながら歩いた。

事前に設定した日程を変更することはできなかつたため、全員がカッパを着て雨の中を現場に入った日も少なくなかつた。

こうして本調査は、時には地元の方を混じえて必ず年1回以上は実施してきた。そしてこの5年間で今福線の旧線・新線の土工区間とトンネル、橋梁区間のほぼ全線を踏破した。



写真－2、藪になっている路線敷

5、現場の概況

今福線の遺構の大半は、県道や農道に意外に近い山の中にあつた。

橋梁は上部工が架けられていたり、あるいは架けられないままに橋脚だけがツタにからまれて立っていたりした。

トンネルは山の中では入口が閉鎖されることもなく虚ろに坑口を空けていたり、例え閉鎖されていても、入口の柵は朽ちて荒れ放題になっていた。それでもトンネルの巻き立てのコンクリートの劣化はほとんどなく、危険な箇所はなかつた。

橋梁の上部工には、スズメバチの大きな巣がつくられているのもあつた。

人家に近いところでは現在でも、路線敷が農道として使われているところや、拡幅改良して県道になっているところも少しはあるが、大半は全く利用されずに放置されているところが多い。



写真－3、放置された橋梁とトンネル

6、地元への働きかけ

この最初の本調査で不思議な現象が起きる場所を発見した。この分科会活動は、当初から地元地域との連携は必要になると考えていたので、その晩のミーティングで、この現象を地元が知らなければ、これを観光の名所にしようと話し合った。

そのためには面白い名称をつけようということになり、和田浩さんの考えた「おろち鳴き」と命名することにし、さっそくメンバーのうちから大畑富紀さんが地元へ話しに行くことを決定した。数日後に地元の代表者へ話してみると、知られていないらしいことがわかった。

これを切っ掛けにして地元との初めての懇談会を開催することになった。佐野町の集会所で2011年（平成23年）11月19日に、スーパー・ソバリエの小村晃一さんの蕎麦を提供して我々の活動をアピールし、地元側と連携できるようにと意図したのである。

この懇談会の場では、すぐに地元側の協力が得られることにはならなかったが、しばらくして、懇談会の出席者の中から強い協力者が現れた。そして県道脇から「おろち泣き」の現場まで、我々が提案した案内看板が地元の手で設置された。それだけに留まらず、その橋梁に新たに「おろち泣き橋」と命名し、それを表示した標柱までが建てられた。

こうしていよいよ我々の分科会と地元との共同が始まり、現在まで途絶えることなく続いているのである。



写真一4、おろち鳴きを発見



写真一5、地元代表者との懇談会



写真一6、設置された標柱

7、マップの作成と公開

分科会活動が続けている間に、世間には鉄道の廃線マニアあるいは未成線マニアといわれる人々がいて、今福線の現場にもこうした人々が時々訪れていることがわかった。ところが他所の路線とは違って、今福線では公開されている地図はほとんどないため、訪れる人々には非常に不便であることがわかった。



写真一七、今福線マップ

そこで2012年の分科会活動の計画に、地図を作成することを決定し、小村晃一さんを中心に作成を始め、2013年度末に一応できあがった。それを島根県技術士会のホームページの今福線分科会のページで公開を始めた。

このマップに対する反響は大きく、地元や浜田市役所から追加記述や修正の要請が相次いでおり、完成度を高める進化の最中である。

これを島根県ふるさとフェア事業に応募したところ、認められてこの地図を6,000部も印刷することができた。島根県技術士会にも1,000部が届けられることになっている。まもなく県内の要所々々に並べられるはずである。

8、浜田市からの要請

地元側との共同関係は、その後も広がりを見せ、我々分科会の本調査には、年々地元側からの参加者が増え、技術士の会員も増え続けている。

地元側との関係が深まるなか、和田 浩さんや大畑富紀さんの勤める㈱ウエスコ浜田支店が、自然に今福線分科会の基地になっていったが、ここに2014年（平成26年）1月に浜田市役所から今福線について話を聞きたいという要請が入った。

同年2月13日に、嘉藤太史ほか5名の分科会会員が浜田市役所の会議室に出かけたところ、久保田章市市長はじめ関係部長が待ち受けておられ、我々の現況説明を聞かれた。そのあと、地域お越しに今福線を取り上げたい、まず全国から300名を集めるシンポジウムを開きたいので、協力してもらいたいとの話があった。我々分科会としては、即座に協力すると快諾した。

シンポジウム開催は、今年（2015年）8月と決まった。その後、浜田市からの呼びかけで、地元側の協力体制も整った。

そして、何度も打合せ会や現地での検討会が開かれ、その度に我々の分科会も出席し意見を求められている。

シンポジウムで大勢の参加者を現地案内するばかりでなく、今福線の遺構を一般の人々にも訪れてもらうようにするために、現地の案内看板や安全施設の整備と駐車場の設置が必要になる。浜田市ではかなりな予算を計上して、これ

らの整備に取り組んでいる。

我々の出番は、今後も増えていくことになる。

9、当分科会の今後の展望

現在は、今年夏に開催されるシンポジウム準備に忙しくしているが、シンポジウムが終っても、多くの課題が残っている。

例えば公開中のマップには、更に便利に使えるようにするために、追加記載や修正の要求が内外から挙がっている。これには応えなければならない。

シンポジウムを切っ掛けとして

今福線は世間の注目を浴びると思われるが、これに詳しい団体としては、当分科会に換わるものはないので、今後も世間から現地案内や関連資料を求められる機会も増えるにちがいない。これにも応えなければならないだろう。

今まで我々は、今福線を調べ資料も蓄積してきたが、これを体系だてまとめることはできていない。

外部からの要請に応えるためにも、我々の活動の記録としても、これらの資料をまとめて冊子にする仕事は必要になるだろう。

さて、テレビの放映も数回あったが今福線が世間一般に知られるようになって、この分科会の目指すところは未だ道半ばである。遺構をどう保存するのか、観光やイベントでの利用だけでなく、今福線の遺構を古酒の貯蔵場所とするなど産業への利用や、科学実験場・試験場としての利用も提案してきた。その橋渡し役としての仕事も残っている。

先日、地元の事情通の人から「今福線を浜田高校の卒業生が研究しているらしい。」と聞いた。よく聞いてみると我々の分科会のことであった。この分科会には浜田高校の卒業生が数人いるには違いないが、「島根県技術士会今福線研究分科会」の名称も実態もほとんど知られてはいないことがわかって愕然とした。

江津市松平町では、先に我々が取り組んだ「島根田舎ツーリズム」により技術士会の名前は、かなり浸透しているのに較べると、浜田市内ではまだまだである。今後の活動を通して、島根県技術士会の名称と実態が知られるようにしなければならない。

幸いにして、この分科会の会員数は増え続け、若い会員、官公庁・NPO 法人に在職している会員も増えており、意気も盛んである。今後も今福線研究分科会は、いっそう活動の幅を広げ、存在価値を高めて行くに違いないと思う。

以上。



写真—8、浜田市・地元との現地検討会